
黄昏の館 -前夜祭より-

射月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の館 - 前夜祭より -

【Nコード】

N29550

【作者名】

射月

【あらすじ】

名探偵コナンの「黄昏の館」捏造話です。

招待状は探偵たちだけに送られたはずなのに、どうしてキッドがあの場に居たのか
妄想を膨らませたらこうなりました（笑）

グーッ、グーッ。

月明かりの差す部屋に、携帯のバイブ音が鳴る。

たった今「仕事」から帰って来て、そしてようやく眠れると思っ
た矢先の出来事に、快斗は眉をこれでもかと顰めて携帯に手を伸ば
した。早く眠ってしまいたい一心で、通話ボタンを押し、そうして
相手も確認せずに耳元に当てた。

それが間違いだったとも知らず。

『やあ、久しぶりですね、黒羽くん』

「げえっ!？」

この甘い口調。まさか。

途端に眠りの淵から引き戻された快斗は、思わず跳ね起きた。思
い切りうめき声を上げ、携帯を耳から話して画面を確認する。画面
には携帯に登録されていない番号が並んでいた。

「・・・てめっ、何で!？」

眠気もすっかり吹っ飛んで、快斗は電話口に向かって問いかける。
否、夜だということも忘れて半ば叫んでいた。

何しろ掛けて来たのは、快斗が願わくば出会いたくも話したくも
ない人物であったのだ。その彼は今は日本を離れて、遠いロンドン
に居た筈では。

『まあ、ちよっと』

言葉を濁らせながらも笑うその顔を思わず想像してしまい、快斗

は多少の吐き気を覚えた。プライベートって言葉、知ってるか。

「テメーと電話なんて御断りだぜ、白馬」

『実は僕の所に一通の興味深い手紙が届きました』

思わず快斗は携帯を耳から離して、見た。

こいつ、人の話を聞きやしねえ。このまま叩き割ってやるうかと、ふと悪意が浮かんで消えた。

『貴殿の英知をたたえ 我が晚餐に御招待申し上げます。』

つきましては下記により催したく存じます。

是非とも御出で下さいますようお願い致しております。

黄昏の館

神が見捨てし仔の幻影』

「・・・」

白馬は快斗の様子を探るかのように沈黙を作り、そうして知らず、口元を緩ませた。

『その手紙に貳百万円の小切手が同封されています。 ただの悪戯ではないと確信したのですが』

「・・・」

「神が見捨てし仔の幻影」。この暗号を解くと「K I D the Phantom Thief」、つまり「怪盗キッド」になる。つまり、この手紙は怪盗キッドから白馬へと送りつけられた手紙であるという。

しかしその「怪盗キッド」である快斗自身はそのようなことをした覚えはないし、まさか唯一の助手である寺井が快斗に黙って手紙を送りつける筈がない。

間違いなく、これは怪盗キッドを餌に、白馬を釣ろうというのだ。ただの愉快犯か。しかし、相手が来るかどうか分からないのにそのような大金まで送りつけるということは。

「白馬、・・・まさかテメー、その晚餐とやらに行くつもりじゃ」

「ええ、その通りです。もう飛行機も手配しましたし」

「・・・っ」

思わず畏だ、と言いかけて快斗は口を噤んだ。

快斗が怪盗キッドであるということは、誰にも知られてはいけな
い機密事項。父の死の真相と敵を討つ為に、快斗自身は窃盗という
犯罪に手を染めた。しかしいくら犯罪者になろうとも、誰にも譲れ
ないプライドというものがある。

白馬が本当にキッドの正体を知っているのかどうかは分からな
かったが、言及してこない今、快斗がそれを認めるわけにはいかない
のだ。

『君が知ったら怒るだろうと思ひまして、そうなる前にお知らせし
ようかと』

何でオレが怒るんだよ、そう返しながらも、快斗自身、勝手に名
前を使われて良い気はしない。そして売られた喧嘩は買う主義であ
る。

『僕自身も「神が見捨てし仔の幻影」の正体を知りたいんですよ』

そのような異名を語る、その真相と犯人を。

白馬自身も、少し面白くないものを感じていたのだ。キッドの犯
行の目的は分からないままだったが、彼の性格を考えるに、このよ
うなことをするとは思えない。そして今日、快斗に電話をしてみ

明らかとなった。

「余計なお世話だっつーの」

しばしの沈黙の後、半目でそう返せば、電話の向こうで僅かに笑う気配が感じられた。

『……やはりそうでしたか』

「けど、サンキュな」

全く、性格のわりに、律儀なのか、そうでないのか。

『何の事だか分かりませんね』

「ちえっ。じゃーな」

『ええ、また後ほど』

会えることを望んで。

そしてその時はきつと。

(後書き)

初めまして、射月という者です

いかがだったでしょうか？

今回が初投稿ということので、少し緊張しています

感想やご指摘等ありましたら、お寄せ下さい

射月は跳ねて喜びます(笑)
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2955o/>

黄昏の館 -前夜祭より-

2010年10月13日22時06分発行